

概要

○ 三浦半島地域では、担い手の高齢化や労力不足などから、土づくりを目的とした堆肥の投入が行われなくなってきている。

○ 緑肥作物（マリーゴールド他）栽培については、令和3年度まで、夏季休閑畑対策やダイコンのセンチウ対策として普及に取り組んできた。

○ 令和4年度からは、国の指定野菜であるキャベツ・ダイコンの安定的な生産を図るため、生産者の意識を変え、適切な土壌管理の必要性について理解促進を図るとともに、有機物を配合した資材等の投入など土壌管理技術の普及について、施肥コスト低減の観点も踏まえて取り組んでいる。

具体的な成果

(1) 適切な土壌管理技術の啓発

・ 三浦半島地域内の2つの農協と連携して、令和4年度に緑肥の栽培事例集、土壌管理技術の啓発資料を作成した。作成した資料は、農協を通じて、キャベツ・ダイコンの生産を行う生産者（組合員全戸）に広く配布し、農業青年クラブ員等には更に内容の説明を行い、取組を広く働きかけた。

・ 有機物を配合した資材については、モデル生産者を選定し、土壌診断に基づいた資材の利用を支援して資材の効果を確認した。また、結果は事例集として、令和5年度に作成・配布した。



モデル生産者
との収穫調査

(2) 適切な土壌管理技術の普及

- ・ 啓発により、緑肥の栽培面積が実施前より約10ha増加した。
- ・ 有機物を配合した資材の販売量は実施前比148%に増加した。

土壌管理の啓発資料

普及指導員の活動

令和3年

- 土壌管理啓発・技術の普及を重点活動として、令和4年度から7年度までの4年間取り組む計画を作成。

令和4年

- 管内の2農協と現状や実施方法について検討。
- 生産者に対して、土壌管理についてアンケートを実施。
- モデル生産者を選定し、有機物を配合した資材を利用する展示ほを設置。
- 緑肥作物の栽培事例集、土壌管理技術や低コスト施肥技術に関する資料の作成・配付。

令和5年

- モデル生産者の展示結果等を基に、資材の種類ごとの効果や利用法を整理した資料を農協と連絡して作成。

期間を通じて

- 緑肥栽培に必要な作業時間や肥料について資料を作成・配布。
- 農業者の研究会、農業青年クラブ等への資料説明や関連する情報の提供。

普及指導員だからできたこと

- ・ 三浦半島地域には、いわゆる生産組合がないため、土壌管理に関心のある中核的な担い手をモデル農家として選定して意見交換した内容を、資材の効果と合わせて資料に盛り込むことができた。
- ・ 農協の営農担当者とかまめに意見交換し、ダイコン・キャベツの共販出荷者に向けて、わかりやすい資料としてまとめ、農協組合員全戸に配付することができた。
- ・ 普及活動の中で、ムギ類が枯れてしまう7月以降の盛夏期に利用可能な緑肥について、情報が少ないことなど新たな課題を把握することができ、緑肥の面積拡大に向けて、展示ほを設けて試作するなど新たな取組みにつながっている。

特産野菜を安定的に生産出荷するための 土壌管理技術の普及支援

活動期間：令和4～7年度

1. 取組の背景

三浦半島地域では、担い手の高齢化や労働力不足などから、土づくりのために行われてきた堆肥の投入が行われなくなっている。当所では、これまで夏季休閑畑対策やダイコンのセンチウ対策の一環としてマリーゴールド等の緑肥の普及を推進に取り組んできた。また、土壌診断や施肥基準による施肥管理を支援してきた。

しかし、土づくりの効果は見えにくく、時間も掛かるため、生産者の中には費用や手間が増えることを嫌い、継続しないこともあり、生産者への働きかけが重要であると認識できた。

また、昨今の国際情勢の変化により、化学肥料など生産資材の価格が上昇していることから、施肥コスト削減の観点からも取り組みが必要であった。

2. 活動内容（詳細）

土づくりに対する生産者の意識を変え、適切な土壌管理の必要性について理解促進を図るため、令和4年度から令和7年度までを普及活動期間として、「特産野菜を安定的に生産出荷するための土壌管理技術の普及支援」を課題とした普及指導活動計画を作成し、次の取組を行った。

(1) 適切な土壌管理技術の啓発

- ・土壌管理に関する啓発資料、緑肥の栽培事例集の作成にあたり、現地情報の収集、関係機関との打ち合わせを行った。
- ・有機質資材を配合した資材（混合堆肥複合肥料、濃縮堆肥、腐植酸資材）を使用した土壌管理を実践するモデル生産者を選定し、展示ほを設置。（モデル生産者 令和4年3戸、令和5年6戸）
- ・モデル生産者に対しては、個別巡回による資材の効果的な施用方法の支援、土壌診断等による土壌調査を実施。
- ・作成した啓発資料については、青年クラブや中核的農業者が組織する農事研究会、講習会等で説明を行った。

(2) 適切な土壌管理技術の普及

- ・堆肥の利用状況を把握するため、土壌管理に関するアンケート調査を実施。
- ・緑肥の作付調査。
- ・緑肥栽培事例集に記載のあった緑肥のは種等について、青年クラブ等に情報提供。マリーゴールドの直は栽培については、実地指導も行った。

3. 具体的な成果（詳細）

(1) 適切な土壌管理技術の啓発

- ・土壌管理に関する啓発資料（図1）、有機質資材を配合した資材（混合堆肥複合肥料、濃縮堆肥、腐植酸資材）の活用事例や効果を整理した資料を作成し、連携する農協を通じて対象者全員（約1,700戸）に配布した。
- ・緑肥作物導入のための事例集、を作成し、土壌管理の啓発資料とともに配布を行った。
- ・展示ほにおける土壌診断等の結果を生産者と共有した。
- ・結果については、活用事例を整理した資料の作成に生かすとともに、継続した取り組みの意識づけにつながった。

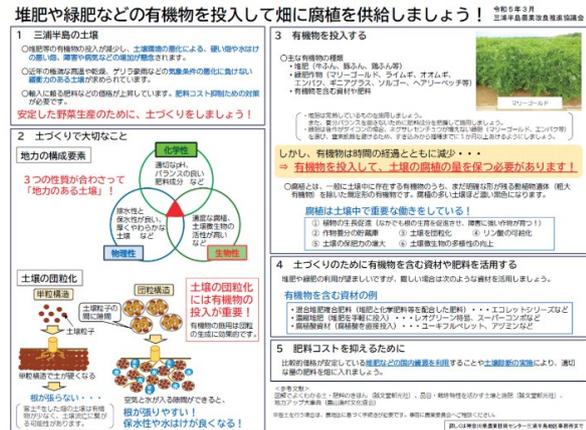


図1 土壌管理に関する啓発資料

(2) 適切な土壌管理技術の普及

- ・堆肥の投入が難しい状況にあり、土壌管理に関するアンケート調査（図2）では、畑の状態がよくないという結果が全回答の三分の二となった。
- ・緑肥の作付面積は実施前の約110%で10ha程度増加した。
- ・有機物を配合した資材の販売量の増加率は実施前の148%となった。

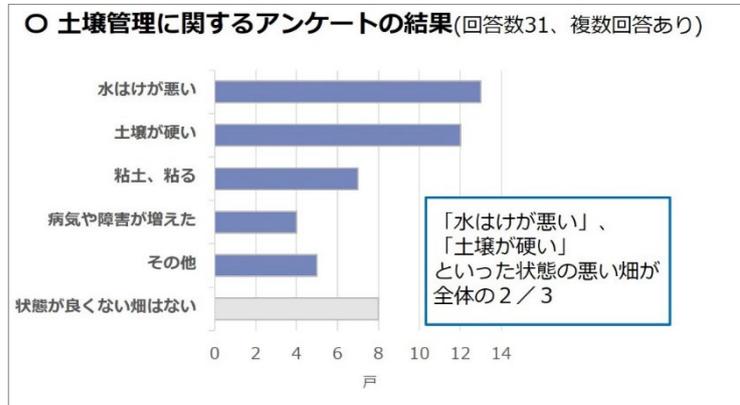


図2 土壌管理に関するアンケート結果

4. 農家等からの評価・コメント

モデル生産者からは「資材の導入は土づくりの面から良い」、「続けて施用することで得られる土づくりの効果に期待したい」、「混合堆肥複合肥料の肥料代は慣行と比べて約3割削減になった」という声があった。

当該活動に関する外部評価委員からは、「課題の性格上、4年間で改善結果を示せるか分からないが、是非、成果を出してほしい。」「技術導入によって、野菜の品質や収量、土壌の化学性・物理性の改善などの効果が示せれば、生産者が積極的に取り組むための動機付けになる。」とのコメントがあった。

5. 普及指導員のコメント

管内農協と連携することで、農業者に対しての啓発資料の配布をスムーズに行えたということだけではなく、地域全体として土壌管理の重要性を生産者に伝えることができた。

緑肥の栽培については、コストや労働力がかかることではあるが、先進的に導入している生産者の技術を紹介することで、これまで取り組んでいない生産者への動機づけにつながってよかった。

(神奈川県農業技術センター三浦半島地区事務所 高田主査)

6. 現状・今後の展開等

土壌管理については、継続的な取り組みにより安定的な生産ができることへの理解が進んだため、引き続き、有機物を配合した資材の利用や緑肥の利用を推進していく。

推進に当たっては、これまで直接説明や、巡回指導を行っていた地域以外にも技術の普及が図れるように、農協などの関係機関と連携した取り組みを進めていく。

肥料高騰の影響から低コストで省力的な技術であれば、普及が期待されるため、目的とする土づくり効果と利用する資材の組み合わせや、緑肥栽培によって増加する労働力や費用についても情報提供していく。

また、普及活動の中で、緑肥の中でも多く利用されているムギ類が枯れてしまいう7月以降の盛夏期にも栽培できる草種について、情報が少ないなど新たな課題を把握することができたので、調査研究等により草種の検討を進める。